2006年度福岡女学院大学大学院人文科学研究科
比較文化専攻生　修士論文要旨

在日華僑・華人の文化的持続性と変容に関する研究

脇　元　清　華

現在日本には約200万人の外国人が生活している。その中で中国人は全体の25.8%で約51.9万人であり，韓国人の58.9万人に次いで2番目に多く，その人口は昭和50年から増加しつづけており，今後も増え続けると考えられる。

古来より，在日華僑・華人は母国の中華文化を保ち，大切にしながら生活する中で，私たち，日本社会へ豊かな異文化を与えてくれた。そして中華文化と日本文化の二つの文化の間で揺れ動き，葛藤し，引っ張られ，苦悩しながらバランスを取りつつ存在していると考えられる。

本論文の目的は，在日華僑・華人が中国という母国を離れ，移民の地である日本でどの程度中華文化を持続し，また変容を遂げながら日本社会の中でバランスを取りつつ，生活，共生しているのか，また彼らは日本社会で自分達の役割をどのように考えているのかを考察する。更に本論文での柱となる「民族教育」については，横浜山手中華学校を事例として取りあげ，授業や成績展覧会の見学や，校長や生徒，保護者へのインタビューを行い，現場で実態把握を行った。

在日華僑・華人の歴史及び人口，出身地，職業や婚姻の現状の把握により，在日華僑・華人の生活は中国と日本との関係に大きく影響されるばかりではなく，国際的な動きにも影響され，絶えず変容しながら時代に適応したスタイルを柔軟に取り入れて，独自の様式を確立していることが分かった。その一方，彼らはその中でも自分たちの母国である中国の教育や思想を子弟に伝え，中華民族としての文化や民族意識を持続させるために中華学校を建て，民族教育に力を入れ続けている。しかし，時代と共に在日華僑・華人の生活

水準や考え方，周りの環境の変化によって，中華学校の存在意義，存在形態も変わってきた。定住傾向にある在日華僑・華人にとってもはや中国語は母国語ではなく，思考言語も日本語，日本で生まれた老華僑の子弟にとっては家庭内で使用される言語も日本語になった。

中華学校は1980年代には一旦入学者が減少したが，日本社会の国際化により現在では在日華僑・華人の子どもだけでなく，日本人の子どもも入学するようになり，入学希望者が定員を超えるようになった。その背景として，それは中国の世界における社会的，経済的地位の向上により，日本人でも中国語を話せることがプラスになると考えるようになってきたことが挙げられる。しかし，中国語を話せない在日華僑・華人の子どもや日本人の子どもが入学してきたことによって，中華学校の教育目的や教育思想自体が変わらざる得なくなった。それは，日本で生活，進学するために日本の学校と同じカリキュラムをこなさなければならず，その上，言語文化を持続していくための「教育改革」を行いながら，中華学校の特徴である「中国語」を限られた時間の中でより効果的に教える必要性が出てきたことだ。

日中国交正常化と共に，多くの中国人が華僑として来日，定住した。それまで中華学校は中華民族としての教育を重視していたが，グローバル化した日本社会への適応を余儀なくされ，また，日本で生まれ育った華僑の子弟に対する中華文化の継続的教育，および日本社会で生きていくための日本的バランス感覚の確立に対する教育も行わなくてはならなくなった。その一環として中国で現在行われている「素質教育」などの考え方を取り入れながらも，中国の教科を取捨選択しながら日本の高校，大学受験への対策も行っている。更に，中華学校では中国の伝統的な文化行事を行い，かつ日本社会との交流や日本的とも言える革新的な行事を行っており，中華文化を日本社会へ広める役割も担っている。このように，彼らが文化を積極的に日本社会へ発信することは，中華文化を広めるだけではなく，相互理解を深め，日本で生活する異民族としての社会権，そして信頼を得るために一役かっていると考えられる。これらのことからも，中華学校が中国の伝統的な文化を持続，継承する場であり，また日本社会に向けて中華文化を発信する最前線の場になっているのは確かである。

在日華僑・華人の意識は，来日したばかりの時は全て中華文化に依存していたと考えられるが，時間，社会の国際化，そして世代交代により，漸次的に日本文化依存へと移行していった。「祖先崇拝」意識は未だ中華文化に依存しているが，「進学」，「就職」意識に関しては完全に日本文化に依存していると考えられる。また，「民族意識」，「伝統」，「食事」に関する意識は中華文化よりであるが，「言語」，「婚姻」，「一般常識」などは日本化していると言える。全ての意識の確立を担う教育に関しては，日中の文化の間でその依存割合を変えつつも，現代日本社会においては，より日本的であると言えるだろう。これら意識の変化は，伝統を守りつつも革新的な要素を取り入れながら独自の民族意識を確立し，絶えず成長している在日華僑・華人社会の意識改革の現れであり，今後は更に日本化していく，または中華文化と日本文化の重複部分の拡大が予想される。

本論文のアンケートおよびインタビュー調査の結果，在日華僑・華人は本場の中国人との「違い」を意識しており，自分たちは本場の中国人とは違う「中国人」であると意識していることが明らかになった。しかし，その「違い」を意識しながらも彼らは独自の「在日華僑・華人文化」とも呼べる中華文化を創成，持続しており，この彼らの持つ「中華文化」とは「本土中華文化＋日本社会（文化）」混合文化であると考えられる。在日華僑・華人は日本で生活していくうちに意識的または無意識的に中華文化と日本社会（文化）に引っ張られ，取捨選択し，バランスを保とうとしながら生活している。彼らは中華民族として決して忘れてはならない，根底にあるものは大切にし，また日本で生活する「在日華僑・華人」として中華文化を持続・継承する役割を担いつつも，常に苦悩，葛藤しながらも日本社会とのバランスを考え，持続していくものは持続し，変容せざるを得ないものは柔軟に変容させてきた。異国の地で生活する華僑としての生き方が，そこにはある。

そして，中国人としてのアイデンティティと日本人としてのアイデンティティのはざまで揺れ動きながらも「日本に住む華僑・華人」としてのアイデンティティを確立しているのではないだろうか。だからこそ，先ほど述べたとおり彼らは今後も母国の中華文化と日本文化（社会）のはざまで苦悩，葛

藤しながら重複文化人としての生き方を模索し続けていくであろう。

これからますます社会は多様化，グローバル化していくだろう。特に日本では個々の個性，意見主張が重視される「個人社会」へと変容している。この中において華僑・華人社会，すなわち「集団社会」の繋がりを重視する彼らのあり方も，徐々に個人主義への適応を迫られるであろう。その時に，集団で守り持続していた中華文化がどのように後世へと継続されるかは在日華僑・華人において重要な課題となると推測される。私たち日本人は彼らの歴史的文化，意識を理解し，それを受け入れ，持続可能な社会，すなわち多民族文化の包容力のある社会構築への努力を絶えず続けなければならないと思う。